

ロシア漂着の「下北漂流民」

多賀丸の遺産 研究を

風土年表を解読する会

作家・大島氏招き講演会

むつ

ど、作家の大島幹雄氏を招き、「江戸期、下北漂流民の物語」佐井多賀丸 牛滝慶祥丸」と題した講演会を大畑公民館で開いた。

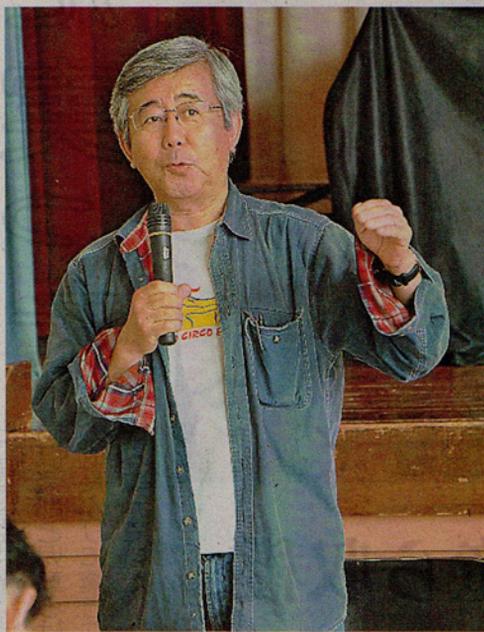
(中村一彦)

主催したのは「原始謾筆風土年表を解読する会」。同年表は、大畑で当時の町長役・検断を補佐する宿老を務めた村林源助(1748~1821年)が執筆した。全52巻あり、大畑の歴史にとどまらず、ロシアなど海外にまで目を向けた内容となっている。

解説の中心的役割を果たしている佐藤ミドリさん(73)＝元大畑中教諭＝によると、年表には、遭難してロシアに漂着した佐井村の多賀丸、同村長後牛滝の慶祥丸など、各地の和船の漂流記が記されている。

市などの漂流民の歴史を調べている大島氏は、多賀丸の漂流民の2世がロシアで編んだ「露日辞典(レキシコン)」について説明。和訳はフト(人)やホペタ(頬)、コチョガス(くすくす)など佐井の方言で記されており、大島氏は「18世紀に下北で使われた言葉がここにある。ぜひ下北の方が多賀丸の遺産を研究してほしい」と語った。

佐井の多賀丸など下北の漂流民について語る大島氏



講演会には約40人が参加した。出身地・宮城県石巻市などの漂流民の歴史を調べている大島氏は、多賀丸の漂流民の2世がロシアで編んだ「露日辞典(レキシコン)」について説明。和訳はフト(人)やホペタ(頬)、コチョガス(くすくす)など佐井の方言で記されており、大島氏は「18世紀に下北で使われた言葉がここにある。ぜひ下北の方が多賀丸の遺産を研究してほしい」と語った。

さらに、江戸時代の紀行家・菅江真澄が記録した「嫁をとらなる日本のやうに目黒髪黒媒が能い」という「ヲロシアヤ(ロシア)」の盆踊り唄を説明。菅江は、佐井の漂流民の話を書き添えており、この盆踊り唄は多賀丸の子孫たちがロシアで歌い継いだ可能性がある

—という説を紹介した。その歌詞を、出席者の女性が下北地方の盆唄「田名部おしまこ」の節で歌い、大島氏を感激させた。同氏は「辞書と盆唄は、多賀丸から下北のみなさんへのメッセージだ」と強調した。